

斎藤月岑作の安政江戸地震の火災写生図に関して

松浦 律子*（(公財) 地震予知総合研究振興会）・中村 操（(株) 防災情報サービス）

§1. はじめに

我々は長年安政江戸地震の刊行済み史料から理科的に各地点の震度を追及してきた。今回は火災が東京市内での被害の主因であった大正関東地震から百周年を記念して、火災被害が江戸市中で大正関東震災などより余程軽かった安政江戸地震に関して、非文字史料である火災写生図に関して新たに判明した事を紹介したい。尚、本稿の内容は既に38号に論説として掲載されたので、詳しくはそちらを参照されたい。尚、38号の付図のキャプションには本文・口絵共に以下の誤植の訂正が必要である。

口絵及び p.59 Fig. A5. Eastward → Westward

口絵及び p.60 付図 8. 南方向→南東方向

Fig. A8. Eastward → Southeastward

§2. 火災写生図史料について

火災写生図は、幕末の神田で数々の信頼度の高い貴重な史料記録を残した、斎藤月岑による「安政乙卯武江地動の記」の付図である。例えば、江戸東京博物館蔵で、題簽(ダイセン: 冊子表紙に貼られた題目用の短冊状の紙)には「安政見聞誌」と、全く別の有名史料と紛らわしいタイトルが追加されているが、鮮やかな色彩が特徴の版がある。この他にも「安政乙卯武江地動の記」の多種多様な版のもの、それらがモノクロで翻刻された際に挿絵として含まれているもの、など複数系統存在する。その中で、今回は森嘉兵衛が「安政乙卯武江地動の記」の翻刻刊行本に用いた、東京都立図書館蔵で題簽には「東都地震記」と記されている史料の写生画を用いる。数種の画を比較すると、これが原本に近いものと判断できた。この「東都地震記」は都立図書館のデジタルアーカイブとして、和綴じ冊子の見開き状態の画像を、ウェブ経由で閲覧可能である。

§3. 和綴じ前の状態の復元

和綴の冊子は、元々は横長の和紙を二つ折りにして、輪でない紙の端を合わせた側を糸で綴じて縦長の冊子化してあるものだ。そこで、試しにまず写生図ページの画像を、綴じられた見開きの中央で二分割した。それぞれ元の一枚の紙として繋がっている前後の見開きページから作成した同様の画像と、素直に繋いで見た。電子的に、和綴じを解いて、元の横長の一枚和紙に戻してみた訳である。この作業によって、「東都地震記」の写生画は、冊子では裏のページになっていた部分同士が、自然に一枚の横長写生画としてつながることが確認できた。要するに元々の写生画は、横長の用紙に西洋の風景画と同様、一枚の絵

として描かれた後、保存のために二つ折りにして和綴じされていたものだった。これによって方位を表す文字の位置も、和綴じ状態のバランスの悪さが消えたのは当然である。

「東都地震記」の写生画は、落ち着いた色調であるが、地震当夜の火災の状況を、月岑の居宅から360度の周囲を、不均等だが八方向に分けて見渡した状態を表している。火災が目立たなかった北西方向の山の手台地方面は、本来は低地の月岑の自宅からは夜間観察できるはずもない。綴じ順からも、最後から二つ目であり、この方向の写生は地震当夜ではなく、全方位の図を揃えるために後日描いたと推測する。

従来、この写生図の最後のページに書かれた「一校了」の日付が、安政江戸地震から僅か一ヶ月後であることから、「安政乙卯武江地動の記」がそれほど早く校了した訳がなく、不合理な日付、とされてきた。しかし、和綴じを開いた状態で、地動の記の本文とは切り離して、写生画一組の校了日と解釈するならば、地震当夜の走り書きと言える素描から、彩色写生画として清書された画が一ヶ月で作成された、と解釈されて、日付も十分妥当となる。「東都地震記」の写生画の最終頁には月岑の蔵書印も押されており、どうやら斎藤家に伝来した、火災写生図の原本、或いは家蔵用控えであり、月岑が記録として残したかった地震当夜の火災状況を最も忠実に今に伝えるもの、と考えて差し支えなからう。従って「東都地震記」に綴じられた写生画の順番が、方位の反時計回りから乱れている点も、実は火災状況の時間的推移の情報も含んでいる。南東方向の半幅の画には、本来は東方向の右端に描かれた深川の火災と重なってしまう霊巖島の火災があるが、これは実際深川よりは遅くに発生した火災であることが地動の記の本文に言及されており、時間差によって実際重なっては見えなかったのである。

§4. まとめ

こうした考察によって、この八枚一組の火災写生図とその詞書きは、他の史料による平面的な消失地域の分布などと組み合わせることによって、安政江戸地震後の火災に関して、三次元的な火災の激しさや、延焼の時間的推移を、ある程度復元させる四次元的な情報源となる。和綴じの絵に関しては、綴じる前の横長用紙状態を復元してみることをお勧めする。史料の電子画像であれば、原本を傷めることなく、こういった作業が気軽に試行できる時代になった。

本研究の一部は文部科学省の委託による地震本部の評価支援事業として実施された。